
イデアにて

北島桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イデアにて

【Zマーク】

Z8061Z

【作者名】

北島桜

【あらすじ】

おじさんの家に住むようになつて、一年以上経つた。おじさんと、その娘の沙織も優しいし、不満なんてない。

なのだけれど、ひとつ会えないのが少し……じれつたい。

(繪畫)

まいじへお願こしあす。

「じー」でもあると思つ。誰にでもあると思つ。だって、全ての物には綺麗たるものがあるらしいから。昔の偉い人がそう書っていたんだから、きっとそういうなんだろう。

綺麗な水面に手を挿して、水中へゅうぐと進ませる。そこには目に見えない色々なものがあつて、掬つと零れてしまつ。

全がーで、無がーで。マイナスすぎたり、プラスすぎたり、そうすると存在する事ができなくて、僕らは足しては引いて。そしてまた、足しては引いて存在していく。マイナスとプラスが同じ数存在しているとよく聞くけれど、そしたら世界は存在できない。

もしも世界に、この世の全てのマイナスがあるとしたら。僕はそこで、悲しいラブソングを歌つ。

ひとつは出会いがない。小さい頃からずっと一緒に、また好きになるとは思つていなかつた。

初めての『テート』は、確か地元の中学校のグラウンドでやる小さな祭り。ひとつに『テート』だよね、と言わせて初めて気づいた。

『じー』が好きなのか考えてみた。落ち着いた調子で、いつも『じー』かに気品を感じられる。けれど、僕が好きになつたのはそんなところ

じやなくて、もつと別のところ。たとえば、台わせ鏡の一一番奥のものを見るような。だからそういうよくわからない感じを、絵に描いてみよ」と思った。

キャンバスはまだ真っ白で、鉛筆を走らせる事ができない。何もないキャンバスの前にいると、いつだつてそうなつてしまつ。何もないこのキャンバスから、モナリザのような作品が生まれる可能性もある。けれど、僕が一筆でも加えてしまえばそれが台無しになつてしまふんぢやないだらうか、だとしたらこのままにしておいた方がいいんじゃないだらうか。

僕はため息をつくと、黒鉛を置いて立ち上がつた。部屋を出でリビングに行くと、沙織がソファでだらしなく転がつていた。目は虚ろで、よだれがでているのも気にせず微笑している。僕がティッシュでそれを拭いてやると、

「あー、音也だ。えへえ、何してるのでおおお

「うふ、ちょっとお腹すいたなつて思つて。何かないかな

「あるよ、これあげるうばあははははは

沙織はゆつくり立ち上がると、服を脱いで胸を突き出した。そして笑い続ける。

僕は服を拾い上げると沙織に着せてやつて、再びよだれがでていたのでそれを拭いた。ソファに沙織を座らせてから冷蔵庫を覗いても何もなかつたので、リビングに戻つてテレビをつけた。沙織がまだ笑い続いているせいで、テレビの音が聞こえない。

文字だけを追つてみたけれど、やつぱり内容はあまりわからない。文句を言おうかと思つたけれど、言つたら言つたでつるさくなりそうなのでやめた。

そういうえば、沙織は何か食べたんだろうか。すでに夜九時を回つているけれど、流し台にそれらしき物はなかつた。

ちょっとコンビニに行つてくるね、と言つて外に出た。遠くでサインの音が聞こえる。ふと、鈴虫の声がない事に気づいた。もう秋になったから、当然と言えれば当然なのだけど。

静かな夜道を十分ほど歩いて、コンビニ弁当を適当に一つ買った。家に戻ると、沙織はわつきと変わらない形でソファにぐつたりしている。けれど表情はわつきと全然違つから、たぶん波がすぎたんだろう。

「弁当買つてきたよ」

僕が言つと、沙織はだるそうになつめいた。スボーツドリンクを渡してやると、少し口に含んでから立ち上がつた。

「吐く」

一言言つて、トイレに行つてしまつた。座卓の上に、ペーパーの包みがあつたので手にとつてみると、下の方に白い粉を見つけた。これはなんだろ？

僕がこの家に住むよになつた時には、すでに沙織はこんなだつた。初めて見た時はちょっと驚いたけど、人間の適応力っていうのは意外とすごいらしい。おじさんも沙織と同じような事をたまにし

てこるし、今ではもう慣れてしまった。

そういう事に対しても、僕は軽蔑もしないし卑下もしていない。だからというわけじゃないけれど、止めようとは思わないし、たぶん言つてもきかない。

沙織が戻ってきた。ソファに座つて、スポーツドリンクをちびりちびりとやってから天井を仰いだ。

「大丈夫?」

僕が言つと、沙織の頭が少し動いた。金髪の髪がさらさらと動いているのを見て、綺麗だなあと思った。

「音也、絵は順調……？」

「新しい絵を描いてると思つてるよ、イメージも一応あるしね

「やつか

沙織はそれきり何も言わなくなつた。僕も弁当を食べ終えると、自分の部屋に戻つた。僕のために一つも部屋を用意してもらつているのは申し訳ないけれど、油の臭いが充満しているあの部屋で眠ることはさすがにできない。とは言つても、絵画関係の道具だけしかないあの部屋よりも、僕の部屋は物がない。机にベッド、後は本棚があるだけで、寂しいなあとは思うけれど、趣味らしい趣味もない。

毛布に包まると、すぐに眠れた。

休日を挟んだ学校っていうのは、どうしていつも憂鬱になるんだろ

う。だらけるのはよくないとは思うのだけど、せりともならない。

放課後、隣のクラスから佐伯くんがやってきて、話しかけてきた。

「今日は来たんだな」

「うん。佐伯くんは、これから部活?」

「おひ

がつちつとした両腕で、シューートする真似をしてみせた。バスケットの部長という、僕からしたらすごい立場の人なのだけど、二年生の頃一緒にクラスの隣の席だったから、よく話すようになった。一年生の頃に描いた僕の絵を見て、心に残るものがあったと言っていた。褒められて嬉しくならない人はいないの例に漏れず、僕からも話しかけるようになっていた事は、つい最近気がついた。

「なあ、やつぱり音也もバスケやるひ? 月曜、毎週のように休むのは青春の無駄遣いだって

笑顔で言う佐伯くん。気を遣ってくれているのはわかるのだけど、僕は運動が苦手だ。考えておくよと囁つと、佐伯くんは話題を変えた。

そんなふうに佐伯くんと話していると、今度は前島先生に声をかけられた。無愛想な表情で僕たちに近づいてくると、メガネを直した。

「青木、今日は部活に出るのか。最近、顔出していないじゃないか。
……責めていいわけではないが

そういうえば、最後に顔を出したのは先週だつただろつか。月に一度か二度しか顔を出してない。

僕が黙つていると、

「……お前には今度の学校祭で作品を展示してもらいたいんだがな。何より、私がみたいんだ」

前島先生はネクタイを調整すると、ため息をついた。

やこへ、佐伯くんが陽気に声を上げた。

「ここつの絵、す」「こつすよね。なのに部活もしないで家にこもってばっかりつていうのは、もつたいたいと思つんですよ」

「ああ、私もそう思つ」

なんだか、褒められすぎて逆に恐縮してしまつ。僕の作品はそこまでいい物なんだろうか。普段は寡黙で有名の前島先生がここまで喋るのも、初めて見るくらいだ。

「……まあ強制してはいるわけではない。余裕があるなら、顔を出しながら」

やう言つと、前島先生は去つていった。佐伯くんも部活に行くと言つて、その場を離れた。

美術部には出るべきなんだろうか。少しの間考えて、結局帰る事にした。以前は毎日出ていた気がするけれど、たぶん両親が死んで

からあまり出なくなつたんだと思う。死んだショックでといつわけじゃない。ただなんとなく……でていなかつだけ。

そういうえば、家族が死んでからもう一年も経つてゐる。キャンバスの前に座りながら、ふと思い出した。高校一年の頃に両親が死んで、今はもう一年生の秋だ。時間つていつのは早いものだな。

黒鉛をキャンバスに走らせたとたん、なんだかすこく残念な物になつたような気がした。しばらく熱中していると、お腹の音が聞こえた。時計を見ると八時を指していた。最近はずつとこんな生活を送つてゐるような気がする。

それにしても学校祭か。普通は夏頃にやるものだと思つけれど、うちの学校はちょっと特殊で、体育祭と文化祭が一緒になつてゐる。理由はよくわからないけど、十一月の一週間をそれだけのために割いてしまつ。最後の日には、町内会主催の屋台があるようなお祭りもある。そういう事つていうのは、別々にした方がいいと思つけど、学校側の意向なのだから仕方がない。

次の日、美術室に行くと数人の生徒が部活動をしているだけだつた。見回してみても、精巧な造りの彫像や偉そうな絵が並んでいるだけで、前島先生はどこにもいない。聞いてみると、準備室にいると言わされたので行ってみた。

準備室に入ると、煙草のにおいに思わず顔をしかめてしまった。それを見られたのか、薄暗い部屋の窓際にいた前島先生のシルエットが、笑つたように揺れた。

「悪いな」言いつつも、火を消そつとはしない。

「学校の敷地内は禁煙のはずですけど」

煙草というか、依存性のある物はいつまでも続けてしまいそうで敬遠気味だ。いい例が、絵の事がある。筆とは、もう小学校からの付き合いになる。

「どうせ誰も来ない。部員数も少ないし、美術教師も私だけだ。掃除もさせていらない寂れたところだからな」

そういう事を言つているんじゃないんですけど」と言葉は飲み込んで、学校祭の絵を描いてみると言つた。

「やうか

「……昨日はあれだけ描いて欲しいみたいな事言つてたのに、淡白なんですね」

前島先生は肩をすくめた。もちろん、僕の嫌味は本心じゃない。絵の事は、きっと口実だったんだろう。

「まあ、描くなら描くで物は用意してある。元々、青木が描く事を前提に展示スペースはとつてあった。美術部としては、歓迎だよ」

準備室を出ると、さつやく絵にとりかかつた。キャンバスを前にして、やつぱり迷つてしまつ。どんな物を描こう。十分ほど色々と考えた。

そういえばもしかしたら、今僕が家で描いている絵は、おじさんや沙織の好みじゃないかも知れない。あれはそれなりに心をこめて描くつもりだけれど、おじさんたちは気に入らないんじゃないだろ

うか。今から描こうとしている絵も、手を抜くつもりはないけれど。

おじさんたちに気に入られた絵は、とんでもないような物だったような気がする。連續殺人犯が主人公の小説を読んで、その時感じたものを絵にしてみたら、二年前に高校生だった沙織がもらつていかと尋ねてきた。中学校の学校祭に偶然来ていたらしい。

それから沙織と同じ高校になつて、絵の事で話しかけられるようになつて、よく話すようになつた。ちょうど去年の今頃に両親が死んでしまって、仲のよかつた沙織は僕を心配してくれた。数日はホテルで暮らしていたのだけど、沙織がよかつたらうちで暮らさないかと言つてくれた。

それからいくつか絵を描いているうちに、おじさんと沙織の好みが大体わかつたと思う。だから、感謝の気持ちもこめてそういうのを描いてみよう。そう思つて、僕はキャンバスに黒鉛を走らせた。

先生に声をかけられて、すでに日が落ちている事にやつと気づいた。家に帰ると、リビングでおじさんと沙織が談笑していた。僕がただいまを言つと、二人は笑顔で迎えてくれた。

ふと、おじさんの薬指にアクセサリーがつけられている事に気がついた。短髪で少し小太りしているけれど、背が高いので迫力がある。そんな風貌のおじさんは、ブランド物のネックレスをしており、背中に刺青を入れていたりしているのだけど、指輪は初めてだつた。

指摘はせずに、

「『飯作るね』と言つた。

「音也は待つてなよ。あたしが作るから」「沙織が僕をとめた。

「でも、悪いよ」

「音也は絵にだけ集中してればいいの。がんばんなさい」

という沙織にしたがって、僕はリビングで待つ事にした。おじさんは座卓の上にあつたビールをグラスに注ぐと、黙つて僕に差し出した。僕も黙つて受け取つて、ちびりと飲んだ。苦い。

「沙織、アレはあるのか」

おじさんがキッチンにいる沙織に、低い声で呼びかけた。あるよ、
「飯の後でいいかな。

「飯を食べ終えると、一人は錠剤を口に含んでいた。今日は注射じゃないんだなあと思いながら、僕は風呂へ向かつた。着替えている途中、笑い声が聞こえた。

風呂から上がつて浴室に行くと、携帯電話のライトが点滅していた。電話をとると、非通知設定で電話を着信している。僕は思わず笑顔になつて、電話にでた。

「こんばんは、音也？」

「うん、こんばんは」

一つの声を最後に聞いたのは、もう何年も前のよつな氣がある。「あいだ聞いたばかりだつていつ」と、どうしてだらう。

「うふ、今度の日曜日、暇かなつて思つて」

「どうして?」

一応、用事といえは絵の事がある。学校祭に出演する絵は、期限まで一ヶ月ない。

「よかつたら遊べないかな」

「大丈夫だよ、全然暇だよ」

「う……うん、即答だね」

「そんな事ないと思うけど」

それから、絵の事や学校の事を話したり、りつの愚痴を聞いて電話が終わつた。友達の彼氏だつたという人が浮氣していたらしい。やっぱり、僕は背徳行為に対しても肯定的でも否定的でもないから、別にいいんじゃないかなあと思つた。言わなかつたけれど。

おじさんの家にお世話になる時にいつも誘つたのだけれど、親戚にお世話になるからと断られてしまった。両親が死んで、唯一の家族といえばいつだけだつたし、できれば一緒に住みたかつたとは思う。

けれど、いつもたまにこうして連絡をくれる。僕が連絡先を聞くと、

「私から会いたい時に会おう。だって、あんまり会こすきるとお父

それをお姉さんの事思て出したから」 と呟われた。

「うは思うけど、僕はやっぱり納得できなくて、最初は何度か非難めいた事を言っていた気がする。

日曜日はすぐになつてきた。絵を描いていると、どうしてかタイムスリップしたみたいな錯覚をしてしまう。それをこんなふうに有効活用できるのなら、いいのかなあ。ちょっともつたいたい気もするけれど。

リビングに行くと、沙織だけがいた。僕を見るなり、

「今日もつちやんが来るの？」

と嬉しそうに言った。僕は照れ隠しに頭をかいて、曖昧に頷いた。
「じゃあ、あたしも出かけるよ。お父さんも夕方には帰つてくれるつて言つてた」

そう言つて、沙織は家を出て行つた。そういうえば、りつが遊びに来る時は、二人はいつも出かけている。気を遣つてくれている事に、少し嬉しくなつた。

それから少しして、インターフォンが鳴つた。けれど、「ディスプレイを覗いても誰もいない。ああ、りつだ。思いながら、玄関に向かうとカメラの死角からりつが現れた。緩やかにウェーブしている髪が胸の辺りで落ち着いていて、上品な青いワンピースと違和感なく溶け合つている。久しぶり、と挨拶されたので、やっぱり綺麗だなあと想いながらそれに返した。

「今日は音也の絵を見たいになつて思つて」

リビングでお茶を飲みながらくつろいでいると、りつはそんな事を言つた。

「学校祭に出すのも、後もう一つの絵もまだ途中だけ、それでもいいの？」

そんな事、かまわないよ。りつはやつと笑つた。

キャンバスや絵の具だけの部屋は、相変わらず油臭い。こうこうとこりで、できればひとつ過ごしたくないのだけど。たとえば遊園地とか、映画館とか、そういうところで笑いあいたい。

描きかけの絵を見て、りつは首を傾げた。

「これは、何を描いてるの？」

やつぱり聞かれた。まさかりつへの気持ち、とは答えられないので、

「たとえば、合わせ鏡を覗くじゃない」

と言つた。

「それで、ずっと奥の方を見よつとするんだ。そこにはつてこるのはよく知つてている自分の顔だけしか映つてなくて、けれどある時、一番奥にある世界で一番綺麗なものを見つけた……っていう感じを描いているんだ」

リツは納得したような、感心したような顔で頷いた。

「だから抽象画っぽくなってるんだね。って言つても、絵が得意じゃない私にはあんまりわからないかな。ごめんね」

「僕も、描いててまだあんまりわかつてないくらいだからね」

そう言つと、申し訳なさそうだつたりつは笑つた。

部屋を出て、僕の部屋に入るなり、リツはため息をついた。

「もうちょっと、汚いくらいでもいいと思つけど。男の子の部屋にしては綺麗すぎるよ。むしろ女の子でもこんなに綺麗な人いるのかなあ。人が住んでないみたい」

「僕もそう思つ」

苦笑いしてしまつた。リツはベッドに座つて、正面から僕を見た。

「家人とはうまくやつてる?」

急にそんな事を言われて、僕はどきりとした。曖昧に返事すると、リツに觀察するような目でじっと見つめられて、なんだかおかしな汗がてきた。リツは僕を見るだけで、何も言わないと決めたのか再びため息をついた。

リツが帰つたあと、お世話になつてゐる人に迷惑かけるのはやつぱりいけないよなあと思った。法律で禁止されているからといって、僕がそういう物を否定しているわけじゃない。肯定的でもないにせよ、今の居場所は氣に入つてゐる。

紅葉が道端に田立つようになるのに比例して、放課後の学校は賑やかになっていく。中間テストがそういう時期にあるので、学校中の誰もがてんてこまいだ。先生たちなんかは、町内会の人たちとお祭りの打ち合わせもあるだらうから、きっと僕たちよりも忙しいと思つ。

その証拠に、元々神経質だつた数学の先生が、僕のクラスの授業をしている時に誰もいない場所にぶつぶつと呟くようになった。みんなは気味悪がつたり、幽霊に取り付かれたとかクスリをやつているとか、色々な憶測をして面白がつた。授業が終わつて教室から出ていく時に、虚ろに笑つて奇声をあげた。

僕といえば、相変わらず絵を描き続けた。その疲れのせいか、最近おかしな夢を見る。

真っ赤に染まつた部屋で、両親が笑つてゐる。お父さんは自分の首を手に持つていて、お母さんは机の上で首だけになつて笑つている。ミニズが成長しそうな物は、お父さんの腹がボロボロになつてゐるからたぶん、お父さんの物だと思つ。

そんなところにりつがいて、異様な部屋の中の唯一の普通だつた。あの青いワンピースを着て、僕に笑いかける。僕に抱きついて、耳元で色々と囁く。それから、顔を離してみると、りつの顔は口裂け女以上にぱっくりと裂けていて、いつの間にか血まみれになつてゐる。そこで田が覚める。

夢を見た日は、色々な人に心配された。佐伯くんは眉を八の字にして、前島先生は眉をしかめて。おじさんと沙織には、そういう時にこそ笑顔だと元氣付けられた。体のだるさや吐き気もあるし、み

んなの言つ通つちゅうと休んだ方がいいんだろうが。

けれど学校祭もあるし、絵も描かなくてはいけない。

ある日、前島先生に呼び出されて煙草へきこ準備室で話した。

「青木、お前にとつて絵つてなんだ」

「はあ、言葉にできない何かを表現する物だと思つてこますナゾ」

「ああ、そうだな。確かにそうだ。だがお前の学祭にてやうとしている絵、といふか、今までよく描いていた絵は、だとすると少し奇妙だな」

「奇妙、ですか」

「いや、可哀想……とも違ひ。とにかく、おれらへマイナスの感情があるだろ?」

僕が黙つていろと、

「お前は才能がある、余計すぎるものまで表現できてしまつべからこの才能が。

私も、両親が死んだ時は悲しかったよ。だが、もう歳だったし、いつ死んでも不思議じやなかつたから、そういう心構えもあつた。だがお前は違うな。予期しなかつた家族の死は、そこまで辛いものなんだな」

「もう引きずつっていたりはしていないんですけどね」

「気が付いていないだけだ。と、私は思つがな。数学の原田を見て、お前はどう思つた？」

「どうじま？」

「おかしいと思つたか。恐ろしいと思つたか。それとも可哀想だと思つたか」

「特に何も思いませんでしたね」

「そうだ。気をつけろ。たぶん青木は、そういうものに対して適応力がありすぎるというか、抵抗がなさすぎる」

僕は、僕が普通すぎるくらいだと思っていたので、なんだか変な感じだった。成績だって中の下だし、とりえらしいものもない。それでも、前島先生は自分の実体験から言っているんだろうか。

中間テストが終わつたその次の日、りつが遊びに来た。僕の絵を見て、あんまり進んでいないねと呟いた。テストがあつたんだ、と言ひ訳がましく言つてしまつたけれど、單に行き詰つてゐるだけだつたりする。

りつは僕の部屋に行くと、当たり前のようにベッドに寝転がつた。いつものワンピースの裾に、ちらちらと膝小僧が見え隠れした。綺麗な肌だなあと思っていると、家人はどうしたのと聞かれた。出かけているよ。おざなりに答えて、そこから視線を外した。気づかれていないだらうか、気づかれていたら、僕はすごく恥ずかしい。

「音也は、彼女とかつて作らないの？」

「できるわけないよ、そんなの。僕なんかを好きになってくれる人なんて、いないんじゃないかなあ」

「音也はね、自信がなさすぎるんだよ。男らしくなつたらいいんじやないかな」

そんな事言われても、困るのだけど。性格なんて簡単に変えられるようなものでもないし、僕はりつが好きなんだ。そうとは言えず、僕は口を閉じた。そう、『うー』といつとこひを直さなくてはいけないなあとは思つけど。

「音也も、もうすぐ18になるんだし、そういう事を楽しんでもいいと思つた」

「僕はりつが好きなんだ。胸くらい触らせてよ」なんて事言えるわけもなく、僕は『ご』によじよじと言つて視線を逸らした。

そんな僕を見て、りつは呆れたように笑つた。でも、そういうところが音也なのかも知れないね。

その日、またあの夢を見た。学校から帰ると、リビングで両親がバラバラになつていて、部屋中血まみれになつてている。足も手も、あちこちに飛散していて、頭だけの両親が僕を見て笑つている。そして、りつは裸で僕に抱きついてきた。誘うように僕の体を触り続けて、いつの間にかりつはバラバラになつてしまつた。

じつとりと張り付く服が気持ち悪くて、シャワーを浴びてから学校に行つた。リビングでは、朝の一発だと言っておじさんと沙織が紙のようなものを口に含み、僕を見て明るく笑つた。

学校に近づくつれで、お祭り前の特有の騒がしさが大きくなつていいく。僕の描いた絵は、一年棟の文化部スペースに展示される事になつてゐる。佐伯くんに誘われて、僕たちはそこへ向かつた。

佐伯くんは僕の絵を見るなり褒めてくれたけど、その時やつてきた前島先生は、僕の絵を見て顔をしかめた。それから僕を見て何か言いたげに口を開いたけれど、結局首を振つて何も言わずにどこかへ行つてしまつた。

学校祭四日目、体育祭のバスケットが終わつた頃、体育館が騒がしくなつた。どこかのクラスの優勝が決まつたとかじやなくて、どうやら数学の原田先生が狂つたように笑い始めたかららしい。見ると、誰の声も聞こえとせずに笑い続けている。目は虚ろで、あちこちによだれがとんだ。強引に体育館から出された後、何もなかつたみたいに体育祭は続けられた。みんななんとも思わないんだろうか。

家に帰ると、僕の絵を見たといつおじさんと沙織に、笑顔で迎えられた。

「やつぱり、お前の絵は最高だ」

快活に笑うおじさんに褒められて、僕も思わず笑顔になった。沙織もよほど嬉しいのか、何かに耐えるように笑いを殺している。

「ふ……っはは。音也、最高」

おじさんもつられたように笑つた。

「ふつひゅ……あひやひや！ おとせああ、もつとい絵が描きた

くないか？」

言われるまでもなく描きたいとは思うけど、そう簡単に描ければ苦労しない。そう言つと、限界とばかり沙織は大声をあげて笑つた。

「アハハハハハ！ 音や、あんた辛い事があるたびに、絵のすゝさが増してるじゃない。気づいてなかつたの？」

「え、そつなのかな？」

おじさんが答える。

「ああ、ああ！ そつとも。お前はもつともつといい物が描ける。俺たちは、それが見たいんだ」

そう言つと、僕が何も言つても笑うだけで、答えてくれなかつた。それどころか、僕が何かを言つたびに笑い声が大きくなつた。

けれど、そんな事を言われて嬉しかつた。だから、いつもは行かなかつたお祭りにも顔を出そうと思つたのだけれど、りつから電話がかかつってきた。

直接会つてその事を伝えたくて、褒められた事は黙つておいた。おじさんと沙織に、明日はりつが来ると笑顔で伝えた。すると、沙織は自分もりつさんと会いたいと言つ。僕としても、自分の家族同然となつた人をりつに紹介するのは望むところだつた。午前中は出かけるらしいので、午後に紹介しよう。

次の日、相変わらずディスプレイに映るうとしないりつを招き入れて、玄関で恒例の久しづりだねを言い合つてから、リビングに向

かつた。けれどやうやくまだ沙織は出かけていた。そして、僕の部屋でくつろぐ事にした。

「絵はできたの？」

りつは笑顔で言つた。学校祭で展示する絵はできたけれど、家で描いているのはできていない。そういうと、りつは楽しみだなあと微笑んだ。

「音也の絵ってね、私好きよ。なんていうか、物の存在を見る事ができる気がして」

「あ、わかってくれて嬉しいな。そういうなんとなくを、表現しようつていつも思つてるんだ」

「やのうひこ、私の事も描いて欲しいな」

りつはそう言つて楽しそうに笑つている。直接描いているわけじゃないけれど、今描いているものはりつだつていう事は言えなかつた。

「つまく言えないんだけどね」

とりつは続けた。

「うして、ただ一緒にいるだけで穏やかになれる。りつの微笑んでいる表情が好きだ。僕が悪い事をしたときは怒つたり、お父さんとお母さんが死んだ時は泣いていたり。そういうりつを形容する全部が、僕は好きなんだと思う。そのまま伝えたかったけれど、勇気が出せない。なので、

「描くよ。ずっと一緒にいたんだ、りつの色々なものを感じ取れる
ような絵を、そのうち描くよ」

そう言つと、つづは嬉しそうに微笑んだ。

「それは嬉しいな。なんかね、不思議なんだ、音也の絵つて。パン
ドラの箱を開けたみたいな気持ちになるの。田一杯に絶望が描かれ
ているんだけど、でもね、そんな世界に悪戯っぽく綺麗な物がある
じゃない。それがすっごく愛しく感じられて、泣きたくなるの」

午後を少し過ぎてから、沙織が帰ってきた。リビングまで迎えに行くと、待ちきれないのかわざといらっしゃるときみやわらじとし
ている。

僕は思わず笑つてしまつて、今は部屋にこもると言つた。りつを連れ
てリビングに戻つても、相変わらず待ちきれないといつよひで
コニコしている。僕がりつと並んで沙織の前に立つと、沙織は笑顔
で言つた。

「つづさんね？」

「うーんじやない

僕が隣を指すと、沙織は芝居がかたじげで言つた。

「えー、でもお、誰もいなーよ

「え、何言つてるの？」

言いながら隣を見ると、そこはやつぱりりつがいる。紹介してもらえたのを待っているのか、ここにしながら僕を見ている。そこで、台所からおじさんのだみ声が響いてきた。

「ふひゃひゃひゃひゃ！　お前、すげーよ」

あれ、おじさんいたんだ。間抜けに聞こえてしまつたかも知れない。けれどちょうどいいかなと思って、おじさんにもりつを紹介した。

僕がりつを紹介しても、一人ともりつを見ようとせずには楽しもうに笑い続けている。

「なあ音也、俺たちがお前の絵を氣に入つた理由、教えてやるうか」

「え？　うん、それは有意義だと思ひつけ」

そんな事よりも、りつを見てもらいたい。

おじさんは台所から出て来て、着いて来いと言つた。沙織もそれについていく。向かった先は玄関。ちらりとりつを見てみると、りつは頷いた。

「行つてきなよ、音也自身が言つていたじゃない、有意義なものだつて」

りつにまでそう言われてしまったので、僕は渋々おじさんたちに着いて行く事にした。おじさんの車は外国産の高級車で、シートも

革張りで座り心地がいい。僕は逆に恐縮してしまつただれど。

おじさんたちは、前の座席でたまに顔を見合させて笑っていた。郊外からどんどん遠ざかっていつて、街路樹よりも自然林が多くなり、やがて田畠をちらりちらり通り過ぎた。

家を出て三時間ほど経った頃、おじさんは車をとめた。ほつたて小屋と言うのが一番似つかわしいぼろぼろの小屋は、打ち捨てられたまま放置されているように見える。近くに民家はなかたし、こんなところに何があるんだろう。

二人は黙つて車を降りて、小屋に入つていった。僕もそれに倣つ。外装にふれてみると、ちくちくと痛かった。

中に入った瞬間、十一月の肌寒い外気とは異質な寒氣を感じた。なんだか冷たい空氣……なのは冬も近いから当たり前なのだけど。それと同時に、刺激臭というかつんとするにおいがした。

まだ夕方の少し前だつていうのに薄暗い室内を見回した。天井からいくつか糸が垂れ下がつていて、なぜか包丁や鎌、ナイフに短刀など、刃物の類がぶら下がつている。そして臭いの原因もすぐにわかつた。一部屋しかない小屋の奥に、腐つた食べ物が山のように積み上げられている。

おじさんと沙織を見ると、天井にぶらさがつていた刃物を手にとり、刃の様子を見ている。ここで料理の練習でもしていたんだろうか。かといって、台所は見つからない。

「……はなんですか？」僕が言つと、

「エリは、お母さんの墓場だよ」

沙織が静かに言った。

「エリでね、お母さんをお父さんと一緒に殺したの」

「えつ？」

「エリのナイフでぐさり、あっちの包丁ですぶり。骨つて意外と硬くてね、切断できたあの快感はすごいんだよ。あと、内臓は意外ともろかつたかな。柔らかくて、刃をたてるとすぐに傷つくる」

薄暗くて、沙織の表情は見えない。俯き加減にナイフを見つめて、逆手に持ちかえて何かを刺すよつなジエスチャーをした。

おじさんは僕の方に歩み寄り、肩を組んできた。

それから、鎌を僕の前でゆらゆらと見せ付けた。

「これでな、あいつの頭かっさばいたんだよ。爽快だつたぜえ？
俺の嫁はな、綺麗な容姿だつたんだよ。抱けばシミ一つない肌は滑
らかで触ると心地よかつた。さらには家事洗濯掃除、俺と沙織のメ
ンタルケアまでできる良妻賢母だつた」

おじさんは鎌を僕の首筋にひたとあてた。

「まずは足をきつた。それから腕。達磨になつたあいつは、泣き叫
んで俺に助けを求めた。ああ、沙織があいつを達磨にしたんでな、
俺は見てるだけだつた。それから、俺があいつに近づくと、あいつ
は助けを求めてきた。助けて、殺さないで、つてな。そこで、俺は
言つてやつたよ。お前はいい女だつた、綺麗な妻だつた、不満はな
かつた。あいつは言つた。だつたらお願ひ助けて」

おじさんはその時の感触を思い出すとじっとりのか、興奮した
よつに鼻を鳴らした。

「だからこそ、俺は達磨になつたあいつを犯してやつた。そうした
ら、どうなつたと思ひ？」

僕は首をふつた。

「なつ、なつしゃあ！ 『ふつ、あぐ……なにもかも諦めた顔で、
気持ちよさうにあえいでた。手足の切り口は焼いて止血してたか
ら、そう簡単には死なかつたしな？』

僕は、その時初めて鎌がさび付いている事に気づいた。よく見れば、それは赤黒い塊がごびり付いているごびだつた。

「……そうですか」

「ははつ、淡白だな音也」おじさんは愉快そうに笑つた。「どうし
て殺したのか、わかるか？ なんとなくだ音也、なんとなくだ。俺
はな、毎日毎日同じ事の繰り返しだけの世界に飽き飽きしてるんだ
よ。何か刺激はないか、そう思つたらとまらなかつた。まずはクス
リ、それから女、酒煙草。クスリはまあ、多少満たされるものはあ
つたが、それでも何かが足りなかつた。

そんな時だよ、お前の絵に出会つたのは。ありやあ狂つてる、と
ことんとギツい狂氣を纖細に描いている。それを見てから、俺は考
えた。人を殺すよつた絵を一度沙織に描いたらどう？ あれを見て、
俺は試してみようと思つたんだ」

僕は、そんなつもりで描いたんじゃない。それとは真逆のつもり

で描いていた。けれどもしかしたひ。

「それからな、お前の家族を殺した時もたまらなかつたよ」

「……はい？」

沙織が狂つたように笑い始めた。おじさんは続ける。

「お前の家族をバラバラにして、それから後のお前の絵が凄まじかつた。どんなドラッグよりも魅力があつたね。」

俺はな、狂いたかつたんだよ音也。狂つてくるつて狂つて、世界から抜け出してみたかつた。子どもが蟻を踏み潰すように、トンボの羽や尻尾をちぎるように。手つ取り早いのは気がふれる事だらう？ 自分だけの世界にいる事ができるようになるんだからな。理由なんて、そんなもんだ。だが実際に気がふれたとかいう状態になると、快感すぎて抜け出せねえ」

なんだか、地面が妙に歪んでいる気がする。田に見える物は全部ぐにゃぐにゃになつて、聞こえる音は周波数の合わないラジオのようだけど、どうしてか意味ははつきりと理解できた。

「……あの、今の話、ひとつは話をなこでくれますか」

「やああああああ！ 音也、いないよいなんだよ

沙織が叫んだ。薄暗い部屋なのに、目が妖しく光っている。そして再び笑い始める。

「そのりつなんて奴はさあ、いねえんだよ。俺が！ お前の家族と一緒に殺したんだからな」

おじさんはそつ言つと、狂つたように笑い始める。沙織も笑いながら、途切れどぎれに言つた。

「アハハハハ！ あんた、最高だよホント。お父さんがあんたの家族を殺したつていうのに、氣づきもしないで家族面。けどそんな間抜けなあんたにもとりえはあるからね、あんたの絵はまるで麻薬だつたよ。とこどん狂気を描いてる、それも何か辛い事があるたびに、それがさらに輝くんだ」

沙織はそれ以上我慢できないというよつて、大声で笑つた。おじさんがひきとる。

「俺たち、それが見たいがためにお前の家族殺したんだぜ、最高だろ？ お前の絵には、力がある。人を狂わせるとびつきりの道具だ。お前の家族が死んでからの絵は、どんな麻薬よりも、どんな奴でさえ虜にさせられちまうんだ！ ふしゃああああ！」

おじさんと沙織は、笑つたり奇声をあげたりしている。一人ともどうしてしまつたんだろう、何を言つているんだろう。僕ははつきりとしない思考で、ようやく理解した。

部屋の奥にあるあれば、たぶん沙織の母親だ。何かの食べ物だと思つていた物は、あちこちきりとられた腐つた死体だ。手足を切断されて、内臓をばらまかれて、腐食しきつた人間だ。

それから、気づけば家に戻つていた。自分の部屋に戻つて、そこで初めてどうやって帰つてきたんだろうと不思議に思つた。りつの事を思い出してリビングに行つてみると、おじさんたちが僕を見て笑つた。けれどそれだけで、りつはどこにもいなかつた。

月曜日、学校に行くと数学の原田先生の話題で持ちきりだった。まことしやかな噂が流れているので、さすがに見咎めたのか担任は遠まわしに自重するように言つていた。

佐伯くんも、僕と顔を合わせると面白がるような調子で憶測を話した。

「なあ、やっぱなんかにとりつかれたのかな。だつてよ、あんなの普通じゃなかつただる。自分で狂つてるとか叫んでたし」

「やっぱつ、おかしくなつてたのかなあ」

「やつに決まつてんだろ」

佐伯くんはそう言つていたけれど、僕はむしろ逆だつた。問題、といつか大事なのは、どうしてそうなつてしまつたのか。だつて、やっぱり普通の人から見たら、ああいつのは異常なのだから、何がそこまでさせたのが僕は気になつた。

もしも僕が原田先生の境遇を知つていたら、共感だつてできるかも知れない。

美術室に行くと、前島先生に準備室に連れ込まれた。そして開口一番に、

「なあ青木、世界を肯定するつてこつのは、否定するといつ事でもあると思わないか」

といきなり哲学的な事を問われて、返答に困った。

「たとえば、明日隕石がこの学校に落ちるかもしれない。だが、私はそれを見てこいつ思う。ああ、仕事がなくなつてよかつたかもしない、隕石が落ちてよかつた」

言わんとする事が、ほんやりとわかつた気がする。前島先生は、それを続ける気はないらしかった。

「なあ青木、もう美術部に来るな。私にはもう、何もできな」こうだ。お前の絵を見て、私は青木を怖いと思つてしまつたんだ。……本当にすまない」

そうやって暇を出されてしまったので、僕は僕の絵を描き続ける事にした。何度も何度も絵の具を重ねた絵は、なんとなく形ができるてきている。ぼんやりとだけれど、感じもでてきていると思つ。

そこへ、沙織が部屋に入ってきた。

「調子はどう?」

「あ、もうすぐできると思つよ」

おやなりな相槌を打つてから、沙織は僕の絵を覗いた。けれど、見た瞬間に顔をしかめて、何かと問われた。

「僕の家のリビングだよ」

「どうしてこんなもの描いてるの?」

「どうしてって、前から描いていた物だし、途中で投げ出すわけにはいかないよ」

沙織は不機嫌に鼻を鳴らして、部屋から出ていった。

遠くから絵を見てみると、どうにも赤色のハリといつか、具合がよくない。どうしてだろう。

その田のうぢ、おじさんと平び話をされた。

「お前にじくない物を描いているらじこな

「僕らしくない物つて……」

「お前に夜な夜なクスリを打つた意味がない。そんな物、今すぐ捨てて」

「あ、どうやら僕は狂っていたらしい。だって、僕も彼らと同じように、クスリをやっていたのだから。」

けれど、僕は描き続けた。そういうえば、おじさんたちは僕の家族を殺していくと言っていた。憎いとか、どうしてとか、そういう思いは全くないけれど、ただ、りつがいないつていうのがあまり信じられない。

りつとは、両親が死んでから何度も会っていたし、触れた事もある。けれど、りつがお世話になつていてるという親戚に連絡してみてもりつがいるという話はなかつたし、携帯電話にもりつの番号は登録されていなかつた。

それからも、たぶん僕はクスリを打たれていたと思つ。夢を見る頻度が多くなつたし、食欲も前より少なくなつた。

佐伯くんは僕を心配して、一緒に帰ろうかと誘つてくれた。佐伯くんも部活はないといつし、断る理由もないで了承した。

「なあ青木。俺さ、お前に近づいたのには理由があるんだよ」

「やうなんだ」

「ああ、なんていうかさ、青木つてなんか他の奴らとちよつとずれてんじやん。感覚が違つていつか、人とは少し違つ事を考えているつていうか」

僕は馬鹿にされているんだろうか。そんな思いが顔にでていたのか、佐伯くんは慌てたように手をふった。

「いや、なんていうか俺と似てるつて思うんだよ。同じ穴のムジナつていうか」

「よくわからないかな」

「うん、俺つてさ、ガキの頃虐待されてたんだよね。誰につけ、親に。まあ今は親戚のところで暮らしてるんだけど、ホントの親はどちらも交通事故で死んだって聞いた」

僕は何を言つていいかわからず、佐伯くんをじっと見つめた。

「うん、よくある話だろ。どこにでも、誰にでもありえるありふれた話なんだ。でもさ、そういう境遇とは関係ないとこりで、たまー

に突然変異しちゃうのがあるんだよね

「それが、僕だと」

「ああ、普通の家族で、普通の学校生活で、普通の成績でつていうやつが。もちろん、すごい天才とか、馬鹿どとかもあるけどさ。どんな時代にも、たまに狂ったのがいるんだよ」

「僕が狂っているか……」

「ああいや、気に障つたんなら謝るよ。でもそれじゃなくて、うまく言えないんだけど、そういう奴はとにかく、普通を演じなきゃいけないんだ」

佐伯くんの言わんとしている事が、ようやくわかった。みんなと笑つたり、おかしな事を話したり、そういう普通を演じなくちゃいけない。つまりは、そういう事なんだろう。

別れ際に、佐伯くんは元気だせよ、笑つてりやそのうひびつとうできる。みたいな事を言って僕の肩を軽く叩いた。

学校に行きたびに自覚してしまった事がある。あれ以来、前島先生は僕を避けていると思う。佐伯くんはそれを不思議がっていたけれど、僕は特に何も思わなかつた。

ある日、原田先生が精神科に入院したと耳にした。原田先生は病氣だつたんだろうか、少し大きな声を出して、ただ笑つていただけだつていうのに、心理学科の先生は何か異常があると思つたらしい。

夢を見た。りつが一人で、綺麗なりビングに立つて僕を見ている。

僕は自分が裸だと気づいて、恥ずかしくなったけど、りつは微笑している。僕は近づいてりつに触れた。その瞬間、まるで僕の指が起爆スイッチだったみたいに、りつの体は膨れて、はじけた。

もう少しで絵が完成するという頃に、おじさんが倒れた。僕の目の前でばつたりと。沙織もいたけれど、倒れたおじさんを見て二口としているだけで、ソファに身を沈ませて動こうとしない。

おじさんに手を伸ばそうとすると、急に腕が重たくなった。どうしてだろう、助けなくちゃ、おじさんは死んでしまうかもしないというのに。きりきりという音がする。ややあって、それが自分の血の流れだと気づいた。嫌な汗で全身を濡らしながらじっとしていると、正気に戻った沙織がどこかに電話をかけた。

それから、医者っぽい服装の人気がやってきて、おじさんをどこかに連れていった。沙織もそれについていつたけれど、僕は家で待つ事にした。

「お父さん、入院するって。普通の病院じゃあれだけど、コネがあるからそこに」

後で、沙織はそう言っていた。

僕は、どうしてあの時すぐに行動できなかつたんだらう。もしかすると、死んでいたかもしれないのに。おじさんが死んでしまうと、僕と沙織の生活費はどうするんだらう。お金がないと、生きていく事だつてできない。だってこのに、僕はどうして動かなかつたんだろう。

そういえば、最近りつと会っていない。

雪が積もり始めた頃、ようやく絵が完成した。肩の力を抜いた僕の頭を、どこからともなく現れたりつが撫でてくれた。りつは穏やかに微笑んでいて、僕を慈しむように見ている。

ああ、やっぱりいるじゃないか。

僕はりつの方を向いて、りつに手を伸ばした。少し冷たいりつの頬は、滑らかで瑞々しい。

「ねえ音也、好きよ」

甘くて、頭の奥がしごれてしまったような声。りつも僕の頬に触れた。抱きしめて、体いっぱいにりつを感じたいと思った。ふと、何かを壊したいと感じるのと似ているな、とも思つたけれど、すぐにどうでもよくなつた。

けれど、りつを抱きしめたと思つたのに、僕が抱きしめていたのは何もない空虚な空間だった。

ゆつくりと振り返る。お父さんやお母さんと一緒に飯を食べた事があつて、僕とりつも笑っていた事のあるリビングが絵描かれている絵。なんどなくが感じられるような、そんな絵になつたと思つ。

……ふと、笑いがこみあげてきた。キャンバスに手を置いて、息を漏らした。一度そうしてしまつと、とまらなくなつた。

どうしてか、すごく可笑しい。りつがいなつていつの間に、こんなにも笑えてしまう。

僕はもう、ずっと前から狂っていた。

(後書き)

感想を置いていって頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061n/>

イデアにて

2010年10月22日00時53分発行